
笑い三年、泣き八年、太鼓たたいて十三年

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑い三年、泣き八年、太鼓たたいて十三年

【NZコード】

NZ763M

【作者名】

つきてつくる

【あらすじ】

吉原で太鼓持ちをつとめる平助は、ある晩、箱屋の成田屋七兵衛のお座敷へ呼ばれることになる。そこは遊女静波の部屋でもあった。やがて彼は、静波と成田屋のあいだに深い因縁があることを知る……。職業小説企画参加作品です。

笑い三年、泣き八年（前書き）

一ヶ月以上の長きに渡つて開催して参りました職業小説企画も、そろそろお開きのようです。参加作品のとりは、マネージャーであります、私りきてつくすが務めさせていただきます。

さてさて、今回の企画へ投入する作品、じつは企画発案者であります近藤義一さんより「ひとつ時代小説でやつてくれ」というリクエストをいただいておりました。なので久々に挑戦してみたんですね、時代物。いやあ、やっぱり難しい。テーマは江戸時代を中心に遊郭で活躍した男芸者、太鼓持ち。正式名称は帮間と云うらしいです。彼らの仕事を通して見た世間の悲哀と、浮き世の情けを上手く表現できておりましたなら拍手ごと喝采を、だめだめならもう読み飛ばしちゃつて下さい。ちなみに、この前書きをしたためてている時点では、小説はまったく完成しておりません。さてさて、どうなることやら……。

笑い三年、泣き八年

「おつこ、じり平助やー」

暮六つの鐘が鳴り止んでももなくのこと。

帮間の溜まりとなつてゐる一階屋の六畳敷に丸くなつていった平助は、聞き慣れた伊左衛門のぢら声に心地よい熟寝から引きもじされた。眠い目をこすりながら、ふわつと生あくびを噛み殺す。

「やれやれ……、まいどまいど、あの塩つ辛い声でたたき起されたんじゃあ、かなわないねえ。寿命が縮んじゃいますよ、ほんと。たまにあ色っぽい姐さんの声で目を覚ましてえもんだ。ぬしさん、おつとめの時間ですわえ、どうぞ起きてくじやしゃんせ……、とかなんとか耳元で囁かれてね」

ぶつくさ言いながら、さわくれ立つた古畳の上でのろのろ半身を起こしてみると、ふたたび階下から伊左衛門のがらがら声が飛んできた。

「ほやほやしてねえで、さわせとお座敷へ上がれってんだ、このとくへんぼく。おめえのへソ踊りがご所望なんだよ。いいか、ここはひとつ上手く踊つてみせて、たつぱりご祝儀はずんでもらうんだ。おこいら聞いてんのか、このすつとこじりこに野郎が」

「はいはい、聞いておりやすよ。丁稚を使うんじゃあるめえし、そんなに、ぽんぽん言うもんじゃんせん……」

役者のように整つた顔をつるりとなで、無精髭がのびていない確かめてから、平助はゆつくりと立ち上がつた。まるで日暮里の布袋さまみたいに、でんと腹が突き出している。歳は、壯年といったところだが、いまだ風貌に幼さが残り、それが何とも言えない人懐っこい雰囲気をつくり出している。彼は、着物の襟をしゅつとじじいてから、その形の良い太鼓腹をぽんと叩いてみせた。

「あつしのへソ踊りがご所望たあ、そいつはまた、ありがた山のとんびからす、ときたもんだ。まあ、太鼓持ちも、お女郎さんも、腹

で稼ぐことにある変わり「やんせんね。はつまつは。もつとも、お女郎なんてえのは、腹は腹でも、あつしらとは使つ部分がまつたく異なるんでしようけれど……」

磨き込まれて黒光りする階段の上を、扁平足をぺたぺた鳴らしながら下つてゆくと、階段下の暗がりから伊左衛門がによきつと首だけのぞかせた。僧形につるりと剃りあげているが、長年のやくざ稼業が染み込んだものか、それとも生まれつきか、淒みのあるなんとなく近寄りがたい顔をしている。その鬱闊の元締めが、眉をひそめて怪訝な表情を見せた。

「……なんでもお大尼さまは、成田屋七兵衛の大旦那つてえ話だ」「え、成田屋さんて、日本橋堀留の？ あの御用箱師の？ へえ、今日は献残屋のふるまい酒でもあつたんですかね」「いんや、成田屋さんお一人で来なすつたようだ」「そりゃ珍しい」

平助は、おおげさに驚いてみせてから、商売道具である一枚皮の団扇太鼓を、ででん、と打つた。

「あの僕約家の成田屋さんがねえ……、とうとう通の道にお迷いなすつたか。歳々年々人同じからず、年を取つてから覚える道楽てえのは、身を滅ぼすつ、なんて言いますけどね」

とたんに、伊左衛門の「つい拳が飛んできて、ぽかりと彼のおつむを打つた。

「痛てつ」

「よけいなこと言つてんじやねえ。そんな無駄口叩いてるひまがあつたら、さつさと仕事へ行つておあしを稼いできやがれつてんだ、このとうくんぼくめ」

ぴしゃりと決めつけられ、平助は着物のたもとで顔を覆い、肉付きのよい猪首をすくめて、うへえと唸つた。

眠らない街、吉原 。

昼夜の別なく営業することを幕府から公認され、遊女三千人を抱

えるといふこの大遊郭は、明暦におきた振袖火事のおり、日本橋から伝法院の北、のどかな田園風景のひろがる浅草日本堤へと移転した。

それが新吉原である。

切り絵図などを見てもわかるように、田んぼのなかに地勢に逆らつたかたちで四角い敷地が、まるで陸の孤島のようにぽつんと存在している。お歯黒ドブと呼ばれる淀んだ堀と、忍び返しをつけた厳重な黒板塀で囲まれた、ある種牢獄のようなものしい空間だ。庶民が暮らす日常とはあきらかに趣を異にする、なんとも胡散臭い場所である。入り口は、黒塗りの大門が、ただ一力所だけ。この大門口から内は、遊女として売られてきた女たちにとつては苦界、遊蕩に来た男たちにとつては、まさに極楽世界というわけである……。帮間の溜まりを飛び出した平助は、ひやかしの醉客たちがそぞろ歩く中通りを、人をかき分けかき分け足早に進んだ。待合い辻を突っ切つて、茶屋の裏手にまわり込む。すると、一件の傾城屋が見えてきた。紺股引に、妓楼の印の入ったはっぴを着た「ぎう」と呼ばれる下男が、玄関先でほうきを使っていた。平助は、例の人懐っこい笑顔を向けて、その下男に声をかけた。

「ちよいと、ごめんなさいよ。今夜ここでお座敷を張つている成田屋の大旦那さまに呼ばれて來たんだけど、お里さんは中にいるのかい？」

「いるよ」

とぶつきらぼうに答えてから、店の用心棒もかねるその大柄な下男は、蔑むような視線を向け平助を見下ろした。そして忌々しげに、ちつと舌打ちする。

「あんたら男芸者はいいよなあ。客と一緒になつて酒飲んで騒いでりやあ、それでおまんまが食えるんだ。姐さんがたみてえに体を売るわけじやなし、俺たちみてえに朝から晩まで雑用と力仕事に追われるわけじやなし……、そんなに樂して生きてたら、そのうち罰が当たつて、ころりとおつ死ぬかもな」

すると平助は、こうこうと見せる泣き笑いの表情になつて、右手を左右に振つてみせた。

「バカあ言つちやあいけませんよ。あつしら太鼓持ちつてえのはね、姐さんがたみてえに色氣でもつてお客に媚びることができないぶん、身につけた芸と喋りだけで座を保たせなきやならない、見た目よりも、ずっと辛い稼業なんだ。いただけるおあしだつて、あんた、ようようスズメの涙ほどだつてえのに」

勢いよく太鼓をでん、と鳴らす。

「死ぬほどに、つとめて太鼓一分とり……、つてね」

下男は、納得いかないといつたふうに、ふんとそっぽを向いた。そこに暖簾を手でかき分け、お里が色っぽい顔をのぞかせる。

「あら、平助さん。お待ちしてましたよ」

年増だが、切れ長の田元が涼しげで、華やかな芸妓とはまた別の、浮き世離れした魅力を感じさせる女だ。彼女たちは「花車」と呼ばれる吉原の遣り手で、客と遊女のあいだを取り持つて、いろいろと世話を焼くことを仕事としている。こういう遣り手のほとんどが、もとはこの吉原の遊女で、そのため花車には歳のわりに嫋っぽい女が多かつた。

「こりやどうも、姐さん。こんち、あつしのへソ踊りがご所望という、物好きのお大尼さまに呼ばれて、こうしてまかり越しやした。へへへ

そう言つて、例の皮張り太鼓をでんと鳴らそうとする、その手を押しとどめて、お里が声をひそめた。

「お座敷へ上がつてもうつ前に、ちょいと耳に入れといてほしいことがあるんだけどね……」

「へ?」

人目をはばかるように素早く辺りをうかがつてから、彼女は小袖のたもとで覆つた口を、平助の耳元へと寄せた。

「成田屋さんがご逗留されるのは、静波のお座敷なんだけどね……。平助さん、あんた静波が、元はさる大店の娘だつたって話、聞いた

」とあるかい？」「

「いえ、初耳です」

平助は、小さくかぶりを振った。お里が、ふつとため息をつく。

「あの娘の生家はね、下野屋といつて、もとは仙台藩御用達の献上物箱問屋だったのさ」

箱屋……。

平助の頭のなかで、なにか閃くものがあつた。

「じゃあ、あれですかい。ひょっとして、成田屋さんとなにか因縁でも……？」

「察しがいいね。むかし仙台の殿様が参勤交代で江戸へ出てきたおり、将軍様ご献上の品を入れるための箱を用意するよう仰せつかつたのが、静波の実家である下野屋だったのさ。箱つたつて、一つや二つじやないよ、なにせ将軍様への土産物すべてを収める箱だからね。急いで相当な数の箱を集めなきゃならなかつた。ところがだよ……」

遊女たちの嬌声がもれ聞こえる楼のなかを、彼女の切れ長の目がちらりと見やつた。

「ちょうど同じころ、浚明院さまが、天朝さまより右大臣の位を授かつてねえ……。それで、その返礼のお品をおさめる箱が大至急必要だつてんで、その納入を、幕府御用達箱問屋の成田屋さんが命じられたのさ」

「へえ……、世の中にあ、ずいぶんと間の悪いこと也有つたもんですねえ」

平助の胸のなかを暗い予感がよぎる。お里がうつむいて、妙にしんみりした口調でつぶやいた。

「そんなことがなければ、あの娘だつて……、ここへ来ることもなく、今こりは大店の娘として幸せに暮らしていただろ」

「じゃあ、けつきょくのところ下野屋さんは御用をしけじつたわけで？」

「ああ、成田屋さんのほうが商売は古いからね。あつという間に江

「じゅうの箱を買い占めちまつたのや」

だんだん話が読めてきた。つまり、成田屋と箱の争奪戦を繰り広げて敗れた下野屋は、仙台藩の御用を解かれたうえ厳しい叱責を受け、あつという間に没落してしまったのだ。そして廃業、離散した家族のなかに、当時、十歳かそこらだった静波がいた……。

「成田屋さんと静波は、互いのそうした因縁をご存知なんでしょうかね？」

恐る恐る平助が訊ねると、お里は、おきやんな仕草で彼の鼻先へついいと指を突きつけた。

「セニや、あたしが心配してるのは、静波つて娘は、あれで氣の強いところがあるからね。そんな親の敵みたいな男を、そうと知つていて自分の座敷へ上げるはずないんだ。けれどよ、まさかとは思うんだけどね……」

お里が言いよどむその先を、平助が続けた。

「あえて自分の座敷へ上げておいて、酒を飲ませ、成田屋さんがすっかり酔つて油断したところを……ですかい？」

平助の言をまっすぐに見つめ返して、お里が言った。

「だから、そうならないようこ、あんたを呼んだのさ。一人を監視させるためには」

「へ？ あつしを」指名くだすつたのは、成田屋さんじゃなく、お里さんだつたんですかい？」

「あたしがね、ぜひにと言つて成田屋さんへおすすめしたのさ。いい太鼓持ちがいるつてね」

「じゃ、じゃあ……、あつしのへソ踊りは？」

まゆ根をよせて情けない表情を見せる平助の背中を、お里が勢いよくほんと叩いた。

「踊りたきや勝手に踊るがいいさ。だけどいいかい、よくお聞き。成田屋さんと静波の二人が、お互にまつわる因果因縁を知らなければ、それでいい。あんたは、話題がそのことにふれないよつ、気を回してくれさえすればいいんだ」

「へ、へえ……」

「だけどもし、二人のあいだに、なにか不穏な空氣を少しでも感じ取つたら」

「……感じ取つたら?」

平助が、こくりと固唾をのみこむ。お里が、ぐっと目に力をこめて顔を寄せた。

「あんたには、全力でその雰囲気をぶち壊してほしい」

「ぶ、ぶち壊すつたつて、いつたいどうやつて?」

「なに情けないこと言つてんだい、あんた太鼓持ちだらう? お座敷でにぎやかな空氣をこしらえるのが仕事なんだらう? だつたら簡単なはなしじゃないか。静波が過去の因縁にどらわれ間違いなどおこさないよう、ぱーっと騒いで楽しい雰囲気をつくりあげるんだ。恨みつらみだけじゃ人は生きてゆけない、ときには過去を忘れ去ることだつて大切なんだよ。いいかい、すべてはあんたの双肩にかかるんだからね、しつかりおやり」

こりやなんだか、大変なことになつてきやがつた。

暮れなずむ夏の空に、ぺん、ぺんと、三味の音色が吸い込まれてゆく。平助はひとつため息をついて、楼の屋根越しにまたたくタ星を見上げた……。

つづく。

太鼓たたいて十三年

「えー、大旦那さまのお匂しだあずかり参上つかまつりました、お座敷をつとめさせていただきます、平助でござります」

つやうやしく挨拶してから顔を上げ、そして彼は心のなかで、あつと叫んだ。てっきり賑やかだと思つていた座敷のうちには、上席に憮然とした表情の成田屋七兵衛がひとり、その横には、これも多少顔を引きつらせた感じの静波が、緊張した面持ちで控えているだけだった。目を凝らして部屋のなかを見渡しても、この二人きりより他にだれもない。賑やかに笛を吹き、三味を鳴らす芸者衆のすがたは、どこを探しても見当たらなかつた。

座の空氣は、あきらかにしらけきつていた。平助は、これはいけないと思いすぐに立ち上がると、たすきをかけ、着物の尻をはしまつて帯にねじりこみ、手ぬぐいで鉢巻をしめた。

「では、さつそぐ^ご無礼をばつかまつりまして、あら面白やの、神踊りつと、はい、やーとこせ、やれ、住吉さまの、きしの姫まつめでたさよ、それつ」

節をつけて歌の文句を詠んじると、そのまま、ついつ、ついつと、外股の足さばきで踊りだした。すぐにその動きにあわせて、静波のひく三味線がゆつくりとがぶさつてくる。

てん、てど、てん、てん。

かつぼれ かつぼれ よーいとな よいよい

猪牙でゆくのは深川がよい わたる桟橋の あれわいさのさ い

そいそと

客のこころは うわのそら

飛んでゆきたい あれわいさのそ むしのそば……

かつぼれは、もとは住吉大社のお田植え神事に奉納される住吉踊

りが原型だといわれている。それが願人坊主などの手により大道芸として広められ、やがて宴会芸に取り入れられた。江戸は吉原で活躍する幫間たちにとって、これはまさに「お家芸」と言つてよい。このけいな振り付けの男踊りではあるが、一流の演者たちの手にかかると、なんともいえない艶っぽさが伝わってくる。はじめ、腕を組んで憮然とした面持ちでながめていた成田屋も、しだいに表情をゆるめ、しまいには手を打つて囃子を入れはじめた。

「あーこつやこつや、つと、あつはつは」

ありやせこつやせ やつとこせ よいやな

坊さま一人で芳町がよい あがるお茶屋は あれわいさのぞ い
そいそと

となり座敷を ながむれば
さしつ押さえつ あれわいさのぞ キツネけん……

「平助とかいったね、さあ、まずはこつちへきて一献やりな」

踊り終わって、額につつすら汗をにじませながらかしこまる平助を、成田屋が手招いた。すっかり気をよくしたようで、片口の銚子をぐいっと突き出してくる。差された盃をうやうやしく受けて、平助はそれをぐいっと干した。

「へへへ、こつやどうも、ようやく生返りやした、ありがとうございます」

「わたしは、こうこうとこるべ一人で来るのは初めてでね、不案内だから、なにか作法にかなわぬことがあるかもしれないが、そのときは遠慮なく言つておくれ」

たばこ盆を手元へ引き寄せながら、成田屋が言った。平助は、背を丸めてちょこなんと座つたまま、顔の前で大げさに手を振つてみせた。

「いえいえ、吉原遊びが格式ばつっていたのは、もう、うん十年も昔の話でござりますよ。わざらわしい作法が嫌われて、深川や新宿あ

たりの岡場所にすっかりお株をつばわられてからは、ここに吉原もだいぶ遊びやすくなりました

「そうかい。いつもは付き合い酒に顔を出す程度で、それもたけなわになる前にそそくさと退散するものだから、遊びかたなどよく分からぬ。今だつて、あんたがこうして来てくれなかつたら、わたしは静波と二人、ずっとここでお見合いをしていたことだうよ」
ははは、と乾いた笑い声を立て、成田屋はゆっくりと煙管をくわえた。

「なんのまあ、それでいしたら、ぬしさん、今日はどうこいつ風の吹き回しでおいでなんしか？」

静波が、盃に酒をそそぎながら小首をかしげる。髪のつえで玉かんざしが踊り、しゃなりと鳴つた。成田屋は、干した盃を静波に返すと、今度はそれに酒をそそぎながら曖昧な返事をした。

「まあ……、この歳になるといろいろとあつてね」

そんな一人のようすを、平助は愛想笑いをつかながらも素早く観察した。たしかに自分がここへ来たとき、一人は緊張して顔をこわばらせていたが、しかし殺氣だつてぎすぎすしたという感じではなかつた。今だつて静波は、素知らぬ顔で盃を受けている。親の敵と酒を酌み交わす、そんな殺伐とした雰囲気はここにはなかつた。
お里の考え方すぎか……。

しかしその後に発した成田屋の言葉は、平助を青くさせた。

「静波……、両親や兄弟のことは覚えているかい？」

「へえ？」

「お前の家族のことだよ。達者で暮らしているのかい？」

さあつと彼女の顔色が変わるので、平助はたしかに見た。市松人形のように白粉を塗りたくつた遊女の顔は、素人目にはその表情の変化をとらえにくい。しかし長年吉原で客と遊女のあいだを取り持つてきた平助になら、彼女たちの心のうちにある、喜びや、悲しみや、怒りや、驚きが、そのわずかな顔色の変化でもって手に取るようになかつた。

やはり静波は知っていたのか。

成田屋が彼女の父の店を潰すきっかけをつくった男で、ひいては自分が吉原へ身売りするめになつた、その原因をつくった張本人だということを。

なにか言葉を取り繕つて話の流れを変えなければと思案しているところへ、気をとり直した静波が、ぽんとやり返した。

「ここは廓のなかでりんす、浮き世のそとの話は、大門の向こうでやつておくんなんし」

「これはすまなかつた、少し酒に酔つてしまつたようだ。若いころから働きづめに働いていたせいで、こつこつとじろく来るといつ身についた野暮な性分が出てしまつ。ゆるしておくれ」

成田屋がそう穏やかに説びると、静波はふだんと変わらぬ顔にもどり、軽くしなをつくつて言った。

「もう、お休みなんせ。あちらに床のじ用意も出来ております」

見ると、奥の間の、わずかに開いた襖の向こうに床が敷き延べられていた。枕元に置かれた香炉から、紫色の煙が天井へ向かつて糸のように立ち上っている。

平助は、なぜだか軽い吐き気をおぼえた。

成田屋は今夜、静波を抱くのか……、自分が苦界へとおとしめたその少女を、抱くのだろうか……、勝ち誇つて、汚して、それで満足して眠るのだろうか……。

心の奥底の、ふだんはフタをして氣づかないふりをしている、その暗闇の部分から、ひしひしとやりきれない思いが、焼けつくよくな怒りがこみ上げてくるのを感じた。

人の世は、なんて無情なんだ。

「これ、太鼓持ち。なにか賑やかな唄でもうたつておくれ」

そのとき、不意に成田屋から声をかけられ、反射的に笑顔で返した。

「へい」

こんなときでも、ふだんと変わらぬ愛想笑いが出てしまう。我な

がら、身についた性分を悲しいと思つた。

しかし自分の仕事は、笑うことであり、ひとを笑わせることであると、平助は信じている。怒りも、憎しみも、悲しみも、それを笑つて、笑つて、笑い飛ばしてしまつことが出来れば、人はその身に背負わされた苦しみを、いくらかでも和らげることが出来る……。平助は、いつもそう自分に言い聞かせ、了見できない苦い思いを心のうちに押しとどめてきたのだつた。

商売道具の団扇太鼓を勢いよく、でん、と打ち鳴らす。

「それでは、お粗末ながら、一曲じき献上つかまつります」

太鼓で調子を取りながら、節をつけて歌いだす。その唄に、静波の弾く三味線が絶妙な間合いで重なってきた……。

ひとつとせ　ひとりのお客はあてにせぬ　あてにせぬ　親切ぶり
して金をとる　金をとる
ふたつとさ　深い恋路とみせかけて　みせかけて　涙を見せれば
嬉しがる　嬉しがる
みつとせ　水も漏らさぬ仲とみせ　仲とみせ　睦言かたれば飛
び上がる　飛び上がる
よつとさ　欲に目がない我がつとめ　我がつとめ　金をとらね
ば　身が立たぬ　身が立たぬ
いつとせ　いつも手管の空なみだ　空なみだ　流してみせれば
金になる　金になる

「あつはつは、じつやあい、じりやあ愉快な唄だ、あははは
なかば当てつけのようにうたつたその唄を成田屋はいたく気に入
つたようで、終始愉快そうに手を打つてはやし立て、笑い声を上
げていた。静波も三味をつま弾きながら、ときどきじみ上げてくる笑
いをくすつと噛み殺している。

廓のなかに拘束され、過酷な生活を強いられている遊女たちの、
そんな悲しみを笑い飛ばすかのようなこの手鞠唄を、平助はとても

気に入っていた。愉快な唄だと思つた。しかし氣に入つてゐるからといって、お座敷で堂々とうたえる歌詞ではない。じつは平助がこの唄をお客の前で披露するのは、今日が初めてだった。

「いやありがとう、今のお前の唄をきいて、わたしのなかで、なにかが吹つ切れたような気がするよ。平助さんといつたね。今後うちの店へ出入りを許すから、たまに遊びにおいで

「へい、ありがとうござります」

平助にいくばくかの「ご祝儀を渡してから、成田屋は、やおら静波のほうへ向き直り居すまいを正した。そして一体なに」とかと田をみはる彼女に向かつて、開口一番「んなことを言った。

「静波、……いや、ijiはあえて、お佳代と呼ばせてもらいますよ。今度ははつきりと、静波の顔から血の気が引いてゆくのが分かつた。彼女はびくっと身をこわばらせると、そのまま視線をふらふらと泳がせた。

「お前は、もうすでに承知していると思うが、今からおよそ七年前、お前の父親と商売で争つて、結果お前たちの店を潰してしまったのは、他でもない、このわたしだ」

平助は、もう一度心のなかで、あつと叫んだ。やはり成田屋さんも……。

「わっちは……」

「たのむから今だけは、今だけいいから、下野屋のお佳代でいてくれないか

「あ、あたしは」

静波は、廓言葉をあらため、かつて大店の娘だったijiの言葉づかいになつて呻いた。

「あたしは、なにもそんなこと……」

「隠さなくてもいい、お前がどんなにわたしのことを恨んでいるか、わたしを呪いながら苦界に身を沈めてきたか、今までそのことを思わない日はなかつた」

静波は、膝の上にそろえた拳をぎゅっと握りしめた。そして固く

引き結んでいた口もとからやがて苦しげな嗚咽をもらすと、まるで生まれたての赤ん坊のように、その顔をくしゃっと崩した。

「ああそうです、呪いました、呪いましたとも……。ある日突然、店は藩から御用差し止めとなり、それまで懇意にしてくだすつた商い先からも手を引かれ、一こちらで注文を取りに行つてもだれからも相手にされず、使用人は一人一人と店を去り、父は妾をつれて出奔、母は病に倒れて亡くなり、幼い一人の弟はどこへ奉公に出されたのやら行く方知れず、そしてあたしは……、木枯らしの吹きすさぶなか女銜に手を引かれて」

声を詰まらせながらそこまで言つと、急に彼女は顔を上げ、成田屋の目をきつと睨みすえた。

「けれど、それがなんだって言つんです？ 今さらそんなこと言つて、わざわざあたしのお座敷にまで言いにきて、それでどうなるつていうんです？ 成田屋さんはそれで少しば氣が晴れるかもしだせんが、だけどあたしは……」

「まあ、ちょっと待ちなさい」

静波の鋭い視線にひるむことなく、成田屋が言つた。

「わたしはね、下野屋さんと商売で争つたことじたいは今でも後悔していないよ。わたしも、そしてお前の親父さんだって、命がけで御上のご用をつとめてきた。どっちが勝つかなんて、そんなものはときの運だし、ことによつちやあわたしの店のほうがなくなつていなかもしれない。だから……、そのこと自体には後悔していないんだ」

ついのほつは、なかば自分に言い聞かせるよつとつぶやいた。静波のほうも、だいぶ心が落ち着いてきたらしく、だまつて自分の膝の先を見つめている。成田屋は、ひとつ咳払いしてから話をつづけた。

「下野屋さんが暖簾を下ろすと聞いたとき、わたしはね、あなたの親父さんに援助を申し出たんだ。嘘じやない。同じ商売をする仲間として下野屋さんにはまだまだ頑張つてほしかつたし、わたしには

助けてやれるだけの余裕もあつた。しかし……」

「う、嘘よ……、お父つあんばずつと成田屋さん、あなたのことを人の心を持たない冷血漢だと言つて恨んでいたわ。傾きかけたお店に、追い打ちをかけるよつた人だつて……」

「いや違ひ、そつではない」

「そつよ」

「では言おう」

成田屋は、ゆつくりと腕を組んで口を開じた。そして、一度なにごとかを言ひかけて思ひどどまり、しかしついにはため息とともに言葉を吐き出した。

「下野屋が潰れた本当の理由は、御用をしくじつて商いが細つたからじゃない。そのことによつて、用人と結託して藩の公金を横領していたことが発覚したからなんだ」

「嘘よつ……」

「これは嘘ではないのだよ。また、お前の父親は妾をつれて出奔などしておらん。牢につながれ、獄死したのだ」

「なんてこと言つて。あなたの言つことなんか信じるもんですか！」

「ええ、ええ、けつして信じるもんですか！」

「下野屋にいた三人の番頭を糾してみれば分かることだ。みな口をそろえて同じことを言つだらう」

静波は、いやいやをするように首を振つた。

「嘘よ……、嘘だわ……、だいいち番頭の弥一朗も、清次も、仁輔も、今じゅじゅでじう暮らしていいるのかさえ分からぬのに……」

成田屋が、閉じていた目をゆつくりとあけた。

「三人とも、うちの店で働いてもらつてている」

「え？」

「下野屋が取り潰しにあつたとき、わたしはそこで働いていた者ができるだけ多く抱えることにした。親切心や、まして慈悲の心からではないよ、これもひとつ縁に違いないと思つたからだ。優秀な人材を野に埋もれさせておくのはあまりにも惜しい。わたしの店へ

きて存分に働いてもらえば、それは取りも直さずお互いのためになることだ」

驚いて何も言えない静波に向かつて、成田屋はさらに驚くべきことを言った。

「それとお前の二人の弟な、新太郎と亀吉だが、奉公に出されたのではなく、上方にいるわたしの弟の養子となつている。ちょうど弟夫婦には子がなかつたので、将来は兄弟一人で力をあわせ店を継いでもらうと喜んでいたし、一人とも腕白ばかりだが元気にやつているよ」

静波は、がんと頭をなぐられたような気がした。なにも言えず、なにも考えられず、ただ金魚のように口をぱくぱくさせていた。そんな彼女に向かつて、成田屋は慈愛に満ちた笑顔を向け、優しく諭すように言った。

「……だから、あとはお前さんだけなんだ。お前だけが、老いたわたしにとって、たつた一つの気がかりだつたのだよ。もう何年ものあいだ八方手を尽くして探させていたんだが、お前の消息だけが、ようとして知れなかつた。だが昨年の夏、商いの仲間に連れられてこの楼へ上がつたとき、偶然お里さんからお前の身の上をきかされて、もしやと思つたんだ。人をやつて調べさせてみたらやはりそうだつたよ。静波は、わたしがずっと探しづけていた、お佳代だったんだ」

成田屋は、ここではじめて涙を見せた。そして膝をすつて静波のそばまでにじりよると、放心している彼女の手を取つて、その顔を覗き込んだ。

「どうだろう、わたしの養女として家に来てはもらえないか？　もちろん家族はみな歓迎している。どういうわけか、うちには男ばかりが生まれてね、妻は以前から娘がほしかつたとぼやいているし、お前が来てくれれば、わたしもこんな嬉しいことはない」

それまで睡然ことのなりゆき見守っていた平助が、ここで初めて口を開いた。

「静波さん、あ、いや、今はお佳代さんだつたね。良かつたじやないか。はは、嬉しいね。世の中にな、こんなに素敵めっぽうな事件がおきる」ともあるんだね。あっしゃ……、なんか感動しちまつて、もつ……」「

「これこれ、太鼓持ちが泣いてどうする」

「ははは、違えねえ。太鼓持ちが泣いてけやあ、おまんまの食い上げだ」

一人がしんみり笑い声を立てたところ、静波がようやく言葉を発した。しかし驚いたことに、なぜだか彼女は、すっかりもとの静波に戻っていた。

「ぬしさん夢語り、楽しんで聞かせてもらひなんした、うふふ、面白かったわいな」

「これ、お佳代。わたしは……」

「こには廓のうち、野暮は言いつこなしであります」

信じられないといったふうに見つめてくる成田屋に向かって、静波はしゃんと背筋をのばし、力強い眼差しで言った。

「わっちにも、意地とこつものがおぞりんす。ぬしさまの申し出は涙が出るほど嬉しおぞらんすが、どうぞそのお話、これまでにしてくりやんせ」

しばらぐのあいだ静波を厳しい表情で見つめていた成田屋は、やがてふと力が抜けたように優しい顔になつて、何度もうなずいてみせた。

「分かつたよ、お佳代、いや、静波……。あたしもいわせかの矜持を持つて生きてきた人間だ、お前さんの気持ちは痛いほどよくわかる。でもね、これだけは覚えておいておくれ。お前さんにはちゃんと帰る家がある。ちゃんとあるんだよ。もし辛くなつたらいつでも訪ねておいで。わたしも、わたしの家族も、いつまでも待つていてから、きっと待っているから……」

そう言つてしまだらけの顔に涙を浮かべる成田屋に向かつて、静波は最後に両手をあわせ、拝むようななかつこつで言つた。

「弟たちのこと、どうぞよろしく頼みます……」

「ああ……」

太鼓が、ででん、と鳴った。平助が帯を解き、着物から腕を抜いて上半身をはだけさせた。その見事な太鼓腹には、墨でこれまた見事なお多福面が描かれていた。平助は泣いていた。男泣きに泣いていた。しかし腹のお多福は、ゆさゆさと波打つように笑っていた。これぞまさしく、泣き笑い。

「それでは失礼いたしまして、へへっ、ここいらであつしの十八番、ヘソ踊りをごらんに入れまするーっ」「ででん、でん！

えー 奴さん どうらく行く
あー こりや こりや
だんなをお迎えに
さても寒いのに共ぞろい
雪のふる日も
風の夜も
さてもお供はつらいね
いつも奴さんは高はしょり
ありやせ こりやせ

完

太鼓たたいて十三年（後書き）

お読みください、ありがとうございました。ちょっと、ちから技を使つてしましましたが、久しぶりに楽しく書かせていただきました。なお職業小説企画を運営してくださった沢木香穂里さま、企画に作品をよせてくださった参加者さま、本当にご苦労様でした。そしてサイトまで読みに来てくださった読者さま、本当にありがとうございました。ふたたび皆さまと、どこの企画でお会いできましたなら、そのときはどうぞよろしくお願ひいたします。でわでわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763m/>

笑い三年、泣き八年、太鼓たたいて十三年

2010年10月8日14時30分発行